

三商レポート

第一話 「守るべきは家ではなく家族」

(株) 三商 内藤 雄

借金の本当のつらさは、本人でなければわかりません。また、借金のことは人に言えません。配偶者にも家族にも言えない借金が、つらさを倍増させます。追いつめられて、やっと相談にみえた方に「まずはご主人に（奥さんに）打ち明けることから始めませんか」とアドバイスします。しかし、「とんでもない。それができればこんなに苦労しません」「そんなことを言ったら離婚されます」「どんなことがあっても一人で何とかします」と否定されます。

Aさん（58歳）もそうでした。病院で老人の介護の仕事をしています。65歳のご主人はタクシーに乗務しています。お子さん2人は既に結婚しています。小さいながらも、ご主人名義の戸建てのマイホームもあります。そのご主人が自営業をしていた頃、人にだまされ借金を背負いました。奥さんがやりくりしながら返済するものの、借金は増えるばかり。悪いことに、以前ご主人に頼んで奥さんの妹さん夫婦の仕事の保証人になってもらっていました。ところが、その妹さん夫婦の仕事が失敗。ご主人は、金融機関から連帯保証人の責任を求められました。

奥さんは、「主人に申し訳ない」とご主人に内緒で借金しながら更に無理なやりくりを続けています。「病院で寝たきりのお年寄りにくればば、私はまだ幸せです。たとえ沢庵とお茶漬けだけでも、食べたい時に食べられますから。どんなことをしても返していきます」と。奥さんの思いつめたその言葉に胸が熱くなります。何とかしてあげたいと思います。

しかし、借金の総額・病気のご主人・年齢・収入などから考え、特定調停や個人再生などの法的手続きによっても返済にはかなり無理があります。やむをえず自己破産をすすめました。「借金を返すために頑張るのではなく、ご夫婦のこれからの人生のために頑張ってみませんか」とアドバイスします。そして、ご家族にお会いしました。しかし、ご夫婦は借金している親戚や勤め先に迷惑がかかることを心配して決断できません。息子さんは大反対。親の生活態度にまで非難が及びました。娘さんはいつも心配そうに両親につき添っています。自己破産の仕組みや手続き、自己破産した後のことなどを納得いくまで説明します。いつももの静かで穏やかなご主人が最初に承知し、やがて家族全員が了解してくれました。

まず自宅を売却し、その代金で担保付の借金を返済し、残った代金を他の借金への配当の原資にあてる。足りない分は、頭を下げて勘弁してもらう。方針が決まりました。さっそく娘さんが古い借家を探してきました。息子さんがトラックを借りてきて引越しを手伝いました。

引越しを終えた奥さんが娘さんと一緒に挨拶にみえました。

「新しい家から近くの公園まで、結婚して初めて主人と手をつないで歩きました」と。チョット照れた、何ともいえないうれしい笑顔でした。うれしくなります。

A さんご家族は家を手放しました。いろいろな思いがあったはずですが、家と引き換えに家族の絆をしっかりと手に入れたと思いました。守るべきは家ではなく家族なのだとあらためて確信しました。

その後、弁護士さんに自己破産手続きを依頼し、お二人とも無事に破産・免責を得て再出発です。そして先日、「やっと娘がオメデタです」と電話をいただきました。奥さんのその明るい声に、こちらが励まされました。

(2004年7月5日)